

跡見学園女子大学 外部評価報告書

令和4年3月31日

跡見学園女子大学 外部評価委員会

目次

全体総括	1
第1章 理念・目的	2
第2章 内部質保証	2
第3章 教育研究組織	3
第4章 教育課程・学習成果	3
第5章 学生の受け入れ	4
第6章 教員・教員組織	5
第7章 学生支援	6
第8章 教育研究等環境	7
第9章 社会連携・社会貢献	8
第10章 大学運営・財務	8
跡見学園女子大学 外部評価委員会 開催状況	10
跡見学園女子大学 外部評価委員会 委員名簿	10

全体総括

跡見学園女子大学は、創立者跡見花蹊の「実践的な教養を備え、自立し自律した女性を育成するための教育・研究を実現する」と言う教育理念のもと、「有能なる社会人、家庭人たる女性の育成」を目標として掲げている。この理念・目標の達成に向けて大学としては、2020年に学園として策定された「ATOMI PLAN 2025 ～2025年に向けての中期計画～」のもと、毎年学長施政方針を作成し、大学における教育・研究活動の充実に努め、大学のさらなる発展に向け取り組んでいる。

内部質保証については、学長及び執行部会議を内部質保証推進組織として位置づけ点検・評価を推進すると共に、その客観性を保証するため2021年度には外部評価委員会を設置し、その妥当性を高めることに努めている。2022年度には内部質保証委員会を設置し内部質保証体制の更なる強化を図るとの事であるが、外部から見てややその役割分担などが明確でなく、外部からもわかりやすい内部質保証推進のための組織とすることが望まれる。

教育については、「跡見学園女子大学の教育理念」に基づいて学位授与の方針（DP）、教育課程の編成・実施方針（CP）を作成し、学内外に公表している。更に、学部教務委員会および全学共通科目運営センター会議が中心となって、恒常的に科目設定と教育目標との適合性が追求されている点は高く評価できる。また、全学共通科目の教養科目や社会人形成科目に、日本の伝統文化（例えば「百人一首」の科目）と社会人としての実践性の双方に力点を置く科目が配置されていることは、貴学の特徴ある教育理念を具現化したものとして評価できる。さらに、コロナ禍のもとで、「遠隔授業」や「ハイブリッド型授業」に関するFD活動を積極的に推進するとともに、サポート体制を確立し、困難な学修状況の改善を図った点は高く評価できる

学生支援については、「本学の学生支援について」のもと、「学生サポートセンター」を設置し、中規模大学の特性を生かし、きめ細かな学生支援を行っていることは評価できる。

社会連携・社会貢献については、地域交流センターを設置し、地域との交流を活発に行っているが、学内での広がりが見えないことが今後の課題であろう。また、女子大学としての特色を生かしたりカレント教育への取り組みの強化も望まれる。

第1章 理念・目的

1. 評価できる点

跡見学園女子大学では、学園創立者跡見花蹊が掲げた「実践的な教養を備え、自律し自立した女性を育成するための教育・研究を実現する」ことを教育理念として掲げている。この理念に基づき、大学、大学院の理念・目的や各学部・学科・研究科の「人材養成の目的」が適切に設定されている。

これらの理念・目的等については『学生便覧』、大学ホームページに明示し公表されている。また、学生の帰属意識を高めると共に教育理念の理解を深めるため1年時の必修科目として「花蹊の教育とライフプラン・キャリアプラン」を開講すると共に花蹊記念資料館を設置し大学の理念・目的の周知を図り成果を上げていることは評価できる。

2020年に学園の中期計画「ATOMI PLAN2025」が策定され、この中で大学の理念・目的、学部及び研究科の目的を実現していくための改革・改善計画が提示され現在進められている。

以上のことから、跡見学園女子大学では理念・目的を適切に設定し、それらを実現するための施策を中期目標・計画として定め、精力的に大学の発展に取り組んでいると評価できる。

2. 問題点、課題及び提案等

学園としての中期計画の中で大学の中期計画も策定されているが、外部環境の変化に応じた計画の見直しなどは、各年度における大学の事業計画により対応している。しかし、このような計画の変更を、どのようにして中期計画に反映させるかが明確ではない。今後、中期計画に反映させるための仕組みが必要と考えられる。

第2章 内部質保証

1. 評価できる点

第2期大学評価結果を受けて、内部質保証推進体制の整備を着実に進めている。学長及び執行部会議を内部質保証推進組織として位置づけ、学長及び同会議から全学的な各種方針が各学部・研究科に示され、その取り組みに関する点検・評価作業を学長及び執行部会議の下に設置された自己点検・評価推進委員会が担う。さらに、同委員会が取りまとめた報告書を、執行部会議とは独立した組織である全学自己点検・評価委員会が確認することで、点検・評価の客観性が担保されている。加えて、2021年度より外部評価委員会を設置して学外者の視点による点検・評価にも取り組み、内部質保証推進体制は制度上構築されたといえる。

学長及び執行部会議における方針提案の際に、学園の方針であるマスタープラン等との連関を重視しており、学校法人跡見学園全体としての特徴ある教育方針を具現化する体制が整っている。

2.問題点、課題及び提案等

今後の課題としては、各種方針に学部・研究科が取り組んだ結果から見出されるさらなる課題や問題点について、次年度以降もそれらを継続的に改善に取り組めるように学長及び執行部会議がPDCAサイクルをまわしていくことである。

また、学習成果の測定指標を開発するために「内部質保証委員会」を2022年度に新たに設置されるとのことだが、学外者の立場から内部質保証推進体制全体を見ると、この委員会はその機能が分かりづらい印象を受けた。執行部会議の下の作業部会とするのも一案と思われる。

第3章 教育研究組織

1.評価できる点

「時代の要求する女子の人材を輩出する」という創立者の教育理念のもと、4学部8学科および2研究科3専攻に加えて、全学部に通ずる科目を運営する全学共通科目運営センター、情報メディアセンター、心理教育相談所、地域交流センターが設置されており、授業および授業外での学習を充実させるための組織が整備され、適切に運営されている。さらに、創立者跡見花蹊に関する資料等を保存・展示する花蹊記念資料館が設置されている。私立大学にとり重要な自校教育の場として活用されている。

上記組織に図書館を加えた6つの附属教育研究組織は、学部・研究科と同様に学長及び執行部会議を内部質保証推進組織とする点検・評価体制に組み込まれ、定期的に評価を実施している。

2.問題点、課題及び提案等

情報メディアセンターに関して前回の大学評価（認証評価）で指摘事項があったが、これは学内の各部署におけるいわゆる縦割りの管理・運営体制を全学的体制へと整備する方向性を示唆するものと理解される。コロナ禍を契機としたオンライン授業導入により、すでに情報メディアセンターが全学的な機能を果たしていると思われるため、2018年度に策定された10か年計画を現状に即して見直してみる必要があるのではないだろうか。

第4章 教育課程・学習成果

1.評価できる点

全体として、「跡見学園女子大学の教育理念」に基づいてDP、CPが作成され、学内外に公表されている点、また学部教務委員会および全学共通科目運営センター会議が中心となって、恒常的に科目設定と教育目標との適合性が追求されている点が高く評価できる。

とくに全学共通科目の教養科目や社会人形成科目に、日本の伝統文化（例えば「百人一首」の科目）と社会人としての実践性（1年次必修の演習科目等）の双方に力点を置く科目が配置されていることは、跡見学園女子大学独自の教育の特徴が示され評価できる。また、1・2年の前期と3・4年の後期を分けて段階的な学修を促進しているだけでなく、前期・後期ともに全学共通科目の必修単位を課して、教養教育の充実化を図っている。

シラバスについても、作成マニュアルとチェック体制が整備され、均質なシラバスになっており、学生が必要とする情報が適切に提供されている。

授業方法ごとに履修者数の上限を設定し、それを大幅に超える科目について翌年度から分級制度を実施していることは、単位の実質化の取り組みとして評価できる。

また、コロナ禍の状況下でオンライン授業関連のFD活動を活発に展開し、教育の質の維持に努めた点も特記に値する。

2.問題点、課題及び提案等

大学院の教育課程において、コースワークとリサーチワークの区別がやや曖昧である。シラバスや教育課程の説明に明記することが望ましい。

また、単位の実質化のために履修登録単位数の上限および進級制度を設定し、厳密に施行している点は評価できるが、2年次原級留置者の比率を縮小するためにも、アドバイザー制度をさらに充実させ、キャンパスが異なる前期と後期の連携を一層強化することが期待される。

第5章 学生の受け入れ

1.評価できる点

学生の受け入れについては、全体として、明確な学生の受け入れ方針（AP）を策定し、公表していること、入試広報委員会を中心に公正な入学者選抜が行われていること、入学者希望者に求める学力水準の確保を志向していること、「自己点検・評価推進委員会」による定期的な検証と入試広報委員会による毎年の検証が実施されていることから、優れた取り組みをおこなっていると評価できる。

入試結果の検証を次年度以降の入試方法の改善に繋げており、PDCAサイクルが機能している。とくに入試の科目数の設定は微妙な問題であるにも関わらず、入学者の学力維持という目標を掲げて入試結果に迅速に対応している点は高く評価できる。

過去の高い定員超過率という経験を踏まえ、貴学はマスタープランで入学定員充足率を1.15未満に定め、令和2（2020）年度までは各学部で適切な入学定員の管理に成功されてきた。このことはPDCAサイクルの観点からも高く評価できる。

受験生確保の観点からも重要な、併設高校を含む高大連携の強化を担う高大接続協議会の設置は評価できる。

2.問題点、課題及び提案等

令和3（2021）年度入学試験では、コロナ禍という非常事態のもとで、定員充足率が全体として下がったが、生活環境マネジメント学科とコミュニティデザイン学科は極端に充足率を下げている。コロナ禍による例外的な要因と恒常的な要因とを区別して分析しようとする姿勢は正しいと思われるので、その分析からの対応策（CからAへの連動）に期待したい。

大学院については、前回の認証評価でも努力課題とされたマネジメント研究科の収容定員が充足されない状況が続いている。マネジメント研究科が令和3（2021）年度に策定した「マネジメント研究科における入学者確保と将来構想」において、短期的対策と中・長期的対策とを検討しているが、現在の状況では、中・長期的な対策の早期の実施が必要ではないかと考える。この点との関連で、リカレント教育実施の前倒しも検討される必要があると考える。

第6章 教員・教員組織

1.評価できる点

教員組織の適切性について、全学における内部質保証の制度を整えた平成30（2018）年度に包括的な自己点検・評価を実施し、それ以降、各学部における点検・評価と並んで、内部質保証の推進組織である学長及び執行部会議が全学的観点から点検・評価及び基本的方針の作成を行っており、PDCAサイクルが良く機能していると言える。

採用・昇任人事についても、「跡見学園女子大学教員選考規程」が整備され、公平性・透明性が担保されている。

FD活動については、個別の出欠チェックなど、参加率の向上の取り組みが実施されている。また、コロナ禍のもとで、「遠隔授業」や「ハイブリッド型授業」に関するFD活動を積極的に推進するとともに、サポート体制も確立し、困難な学修状況の改善を図った点は高く評価できる。

全学的な内部質保証の体制と関連させ、教員個人のレベルにおいても「教員の自己点検・評価シート」の作成とそれに基づく自発的な改善の取り組みが実施されるようになっている。

2.問題点、課題及び提案等

教員配置については、前回の認証評価で指摘された年齢構成の偏りが学長及び執行部会議の方針のもとに是正されつつあり、ジェンダーバランスも取れているので問題はないものの、引き続き努力されることを期待する。

教員の自己点検・評価が一時中断されていたが、「シート」の作成が令和2（2020）年度分から再開された。継続的な実施とともに学生の授業評価と組み合わせて、さらなる教員の教育力の向上を目指していただきたい。

令和6（2024）年度に予定されている教育課程の再編においても、全学的な判断を重視し、教員選考の基本方針に基づく公正な採用人事が行われ、バランスが取れた教員配置が

行われることを期待している。

第7章 学生支援

1. 評価できる点

学生支援に関する方針に関しては、「本学の学生支援について」のもと『学生便覧』、『学生手帳』に明示され周知されている。また、この方針に基づき学生支援体制の整備と、適切な実施がなされると共に、その適切性に関しても定期的に点検評価され改善改革に取り組んでいる。

特に、学生相談・修学支援・健康上の支援など学生生活全般の支援を目的とした「学生サポートセンター」が学生課の下に新設され、学生課が生活支援のワンストップサービスの窓口となり、相談内容に応じて保健室・学生相談室・学生支援室につなぎ、円滑な学生支援ができるようになった点は評価できる。

また、コロナ禍への対応として、アカデミックアドバイザーによる面談やオリエンテーションもオンライン化し、単位修得状況、生活状況、オンライン授業、就職活動に対して丁寧に対応することにより学生の不安を解消した。さらに、「オンライン授業学生支援窓口」を設け学生の学修上の不安を解消するための支援を積極的に行うと共に、オンライン授業に伴う学生の支出増に対応するために、1人当たり5万円の「学生への修学支援金」の支給を行うなどのきめ細かな学生支援についても評価できる。

さらに、正課外教育として「目に見えないカリキュラムの充実」により、クラブ活動、サークル、ボランティア等の課外活動や国際交流を推進している。また、障がいを持った学生へのサポートを登録したボランティア学生（36名）が行うなど、学業に加えた課外活動によって、正課内教育で身に付けることの難しい、理念に基づく「自律し自立した女性」の育成をしようとする試みは評価できる。

また、OGが就活サポーターズに1200名以上参加し、在校生の自立を支援している点は、「日本文化に根差した教養」の成果として、OGが利他・共助活動をしているものと評価できる。

2. 問題点、課題及び提案等

ハラスメントの防止に関しては、ハラスメント防止委員会を設置し、ハラスメントのないキャンパスを旨とした啓発、情報提供を行っている点は評価できる。しかし、ハラスメントの相談窓口が、教職員からなる「ハラスメント相談員」であり学内に限られている。ハラスメントの内容によっては、学内では相談し難いこともあるので、学外の相談窓口の設置に関する検討が望まれる。

「目に見えないカリキュラム」を充実させるために、そのインフラとして学生会館の竣工が待たれるところであるが、課外活動を多様化・充実化するためには、スポーツ・文化・ボランティアに関する外部識者による様々な啓発が有効と考える。学内から自発的な活動気運が盛り上がるのが重要であるが、大学の方針に沿った啓発セミナー等のソフト面の充

実が望まれる。

第 8 章 教育研究等環境

1. 評価できる点

教育研究等環境に関する方針については学園の中期計画「ATOMI PLAN 2025 ～2025 に向けての中期計画～」及び「教育研究等環境の整備に関する方針」に明示され全教職員に周知されている。この方針に基づき教育研究活動に必要な施設及び設備の整備、図書館、学術情報サービスの提供体制の整備及び機能化、教育研究活動を支援する環境や条件の適切な整備と促進が進められている。

研究倫理を遵守するための必要な措置及び適切な対応、教育研究等環境の適切性についての定期的点検・評価とその結果を踏まえた改善・向上に関しても適切に行われている。

特に、学生の P C 必携化と新型コロナウイルス禍に伴うオンライン授業導入に対応した構内ネットワーク環境の整備・充実に関しては評価できる。情報メディアセンターの着実な施設設備の更新・新設・保守によって、学校閉鎖による授業のオンライン化に対応する基盤（教室の W i F i 対応、学園ネットワーク帯域の拡充、学生支援システムのサーバー容量の拡充）が提供された。

また、主要建物と導線のバリアフリー化の着実な進捗と、学生の自主的な学習を促進するためのラーニングコモنزの整備（新座キャンパス図書館及びラウンジ）によって、多様化する教育・学習ニーズに対応している点は評価できる。

図書館は、学生の学習・研究の基盤であるので、コロナ禍に対応して、学外から利用できる電子書籍を大幅拡充し、データベースへのアクセスを可能にするサービスを導入し、さらに図書の配送貸出、郵送返却の対応をした点も評価できる。

授業のオンライン化に対応するために、全学及び各学部で遠隔授業に関する F D によって、教員間で経験を共有する取り組みがなされ、教員有志による「授業力向上のための交流サイト」が立ち上がった点は評価に値する。

2. 問題点、課題及び提案等

図書館開館時間について、新座キャンパスの図書館（約 4 0 万冊）が中央図書館の機能を果たしているにもかかわらず、文京キャンパスの図書館（約 1 2 万冊）との開館時間が異なっている。平日で 1 時間、土曜で 1 時間 4 5 分、開館時間が短い。この違いはキャンパスが開いている時間の違いかもしれないが、図書館は、学生の学習・研究の基盤であるので改善の検討が望まれる。

育児・介護休業法の改正（令和 4 年 4 月 1 日より段階的に施行）は、教員・TA 及び職員の労働環境に係るものであるが、「点検・評価報告書」では触れられておらず、その対応について検討、「点検・報告書」への記述が必要ではないかと思われる。

第9章 社会連携・社会貢献

1. 評価できる点

跡見学園女子大学文京キャンパスの所在する文京区とは、多彩な連携を組み立てている。教育基本法や学校教育法を待つまでもなく、大学が果たすべき役割として、従来の学術研究、人材育成に加え、教育研究の成果を広く社会へ提供することが新たに位置付けられており、大学の知の集積を社会や地域に還元していくために、今後とも様々な視点での関係、協力を深化する必要がある。跡見学園女子大学が地域交流センターを設置したことは窓口の明確化に繋がり評価できる。

2. 問題点、課題及び提案等

一方、地域連携、社会連携に積極的に協力するのは特定の教員やゼミと、地域交流センターの事務職員に限られているのは課題である。報告書の中でも、数年前に内部アンケートで地域連携にあまり関心がないという回答が多かったという結果が示されており、これまで以上に協力する教員を増やしていく必要がある。

次に今後さらなる取組みを求めたい点を述べる。公開講座や生涯学習という形で地域に大学を開放するという取組みは進んでいるが、これからの大学に求められているのは、リカレントとリスキリングである。女子大学であるため卒業生の中にはかつてM字カーブと言われたように、結婚や出産の機会に職から離れた人たちがいるものと思われる。その人たちが今後とも社会の大切な担い手として活躍するために、リカレントの必要性が高まっている。またDX等の技術革新に対して既に社会で働いている卒業生を含む社会人が、もう一度新たな技術や知識を得て、仕事に活かしていくリスキリングについても取組みが必要である。

さらに、定員充足率を高めるためにも高大連携について取り組む必要がある。例えば、文京区内でも、女子の定員を持つ高校はいくつかあり、一定の圏内のとの高大連携についても踏み出す必要はあるだろう。最後に、女子大学であることを活かして、SDGsやダイバーシティについての取組みを求めたい。特にダイバーシティの関係で、LGBTQに対する新たな取組みの検討が必要であろう。例えば、毎年3月8日の国連が定める国際女性デーや、11月25日の女性に対する暴力撤廃国際デーなどに際し、女子大ならではの啓発活動や関係諸団体との連携を進めて欲しい。

2050年にカーボンゼロを国が目指そうという中で、大学も事業系の排出源としてCO₂削減のさらなる取組みが必要である。

第10章 大学運営・財務

1. 評価できる点

大学運営の方針は、中期計画であるマスタープランを踏まえて策定され、ホームページに公開されている。この方針のもと毎年学長施政方針が作成され、全学教員集会、職員集

会において学内構成員に周知されている。

学長を始めとする大学運営に必要な職の職務と選出方法は、各種規定に明示され適正な運用がなされている。また、大学運営に必要とされる事務組織は「学校法人跡見学園組織規程」に基づき設置され適切に機能している。

全教職員を対象とした各種研修会の実施などにより、教職員一体となった学生支援能力の向上を図るなどFD、SD活動が適切に進められている。

経営状態を表す各種指標は良好であり、教育、研究活動を安定に実施するために必要な財務基盤は確保されていると言える。特に、今回のコロナ禍の中での支出増に対しても財務の健全性を維持してきていることは評価できる。

2.問題点、課題及び提案等

2021年度の入学者の数が定員に達しないことから、長期的に財政を圧迫する可能性があり、入学定員の確保の方策を検討する必要がある。また、SD活動に関しては、各種研修会等を実施するなど活発に進められているが、効果的、効率的に実施する観点から、「SD実施方針」等を作成し教職員に周知することが望ましい。

以上

跡見学園女子大学 外部評価委員会 開催状況

令和3年度

区分	開催日時・場所	主な議事	出席者
第1回	令和4年1月29日(土) 13:00~13:40 跡見学園女子大学 文京キャンパス1号館3階 M1302 小会議室/Microsoft Teams	<ul style="list-style-type: none"> ・学長挨拶 ・委員の紹介 ・点検・評価報告書の説明 ・今後の進め方について 	川名委員長 大場委員 栗田委員 古岡委員
第1回 事後 説明会	令和4年2月5日(土) 13:00~13:50 跡見学園女子大学 文京キャンパス1号館3階 M1302 小会議室/Microsoft Teams	<ul style="list-style-type: none"> ・学長挨拶 ・委員の紹介 ・点検・評価報告書の説明 ・今後の進め方について 	川名委員長 成澤委員
第2回	令和4年2月26日(土) 13:00~14:30 跡見学園女子大学 文京キャンパス2号館3階 M2308 教室/Microsoft Teams	<ul style="list-style-type: none"> ・学長挨拶 ・点検・評価報告書に係る 質疑意見 	川名委員長 大場委員 栗田委員 成澤委員 古岡委員
第3回	令和4年3月26日(土) 10:05~11:05 跡見学園女子大学 文京キャンパス1号館3階 M1302 小会議室/Microsoft Teams	<ul style="list-style-type: none"> ・学長挨拶 ・外部評価報告書に係る質 疑意見 	川名委員長 大場委員 栗田委員 成澤委員 古岡委員

跡見学園女子大学 外部評価委員会 委員名簿

委員長：川名明夫（拓殖大学学事顧問、前学長）

委員：大場昌子（日本女子大学教授、前学長）

委員：栗田啓子（東京女子大学元副学長）

委員：成澤廣修（文京区長）

委員：古岡秀樹（学研ホールディングス顧問）

（5名）